

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第136号 2026年4月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学教職教育部 富岡研究室  
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 『思ひ出草子』(1938年2月)から —静岡高等学校卒業生小林一男—	谷本 宗生	2
女子教育史散策・昭和戦時下編(85) 共立女子学園の場合I	長本 裕子	4
小林一男の私製・大学卒業アルバムについて —東京帝国大学文学部国文学科卒業—	谷本 宗生	11
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(24): 『最新東京学校案内』(大正10年)(3)	吉野 剛弘	14
神辺先生を訪ねて(3)	長本 裕子	20
刊行要項(2026年2月15日改訂)		22
短評・文献紹介 権藤智之・戸田穰編『内田祥哉は語る』(2022 年)について(谷本宗生)、ドキュメンタリー映画「『新渡戸の夢』 ～学ぶことは生きる証～」上映会&トークイベントを鑑賞して(長 本裕子)、梅棹忠夫『知的生産の技術』について(富岡勝)		23
会員消息 谷本宗生、山本剛、富岡勝		26

## コラム

『思ひ出草子』(1938年2月)から  
—静岡高等学校卒業生小林一男—

たにもと むねお  
谷本 宗生(大東文化大学)

静岡高等学校(文丙)を昭和13年に卒業し、東京帝国大学文学部(国文学科)に進学した小林一男が、高校卒業を前に友らに自身との思い出を綴ってもらった『思ひ出草子』(1938年2月)のなかから、興味深い

静岡生らの激励エールなどをいくつか紹介してみたいと思う。本資料は、古書店を介して、小林の静岡及び東京帝大の卒業アルバムとともに一括入手したものである。

まず、同資料の表紙裏に、小林自身が「昭和十三年二月十七日 大学入学願書受理証明書得シ夜記ス」とし、次のように綴っている。「ああ消え果てし青春の愉楽の行くへ今何処 心のままに興じたる 黄金の時よ、玉の日よ、汝帰らずその影を、求めて我は嘆くのみ ああ移り行く世の姿、ああ移り行く世の姿 塵をかぶりて若人の 帽子は破れ粗衣は裂け 長劔は錆をかうむりて 之たる光今何処 宴の歌も消えうせつ 刃音拍車の音もなし ああ移り行く世の姿 ああ移り行く世の姿 されど正しき若人の 心は永久に冷えるなし、勉めの日にも歓びの 集ひの日にも輝きつ、古りたる殻は消ゆるとも 実こそは残れ我が胸に その実を犇と護らなん その実を犇と護らなん」と。

魁察の中曽根康弘は、「お前は三河の猿、俺は上州の猿、性格は違ふけど、同じものは確にある。この奴を生かさう」と記している。魁察十九室の福永寧は、「人生ハ真剣ニ、芸術ハ楽シ。読書百変 尚友三年」と。悟察十一室の内山敬義は、「同じ釜の飯を喰つた 同じ道場に過した 泣いて笑つた三年間 昭和十三年一月」と記している。東郷民安は、「思ひおこせば一昨年 仰秀寮自治記念祭の時 祭の火の前で 抱きあつて、泣いたつけ 昭和十三年一月二十日 悟寮送別コンパの夜」と。

映察の鈴木淳一は、単純に短く「道ハーツ」と記している。映察十一の小倉仁海は、「学校、寮生活、運動 そしてその間を点綴するもの… 昭和十三年二月三日」と。不二寮の高富味津雄は、「やれ、どうにかなる」とエールをおくっている。不二寮十一室の齋藤文久は、「煙草、残飯、寮生活そして… 眺望のきく処へ導いてくれた兄よ 有難う。俺の入寮当時同室の貴様と電気が消えてからもよく駄弁つたつけ」と。

また小林が在学中所属していた弓道部部員からも、次々に感謝と激励が記されている。弓道部の井原正紀は、「俺は人生八十年と思ふ。何かまとまつたものを仕上げるには八十年要る。今君は一足先には出発するが一生一緒に居るだろう。たのしかも南の浜辺集ひ寄り 共に笑ひし三歳の契は」とする。弓道部員の竹内正人は、「科学的並に哲学的言説に対しては、絶対的懐疑主義が唯一の合理的態度である(ストームの晩の気持の一端)。天地正大気 昭和十三年二月九日」と。また同部員の伊東伝助は、「僕は人見知りするたちで、寮の三年生ともあまり口をきかなかつたが、小林さんとはどういふわけか、かなりしたしくしてきた。もうぢきあの毒のない悪口、サバサバした猥談もきけなくなるのかと思ふとさびしい。そんなわけで弓道部には稀な悪筆をふるつたんです」と綴っている。

この思い出の文面からみる限り、高校時代の小林らは自由奔放な学生生活をおくっていたのであろう。東京帝大国文学科に進学する文才センスも、たしかに感じられる。小林の学生時代は、文武両道といった点からも充実していたようだ。

**\*コラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

## 女子教育史散策・昭和戦時下編(85)

### 共立女子学園の場合 I

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

共立女子学園は、明治19(1886)年3月、共立女子職業学校という名称で開校された。<sup>みやかわやすとも</sup>宮川保全を始めとして、永井久一郎、鳩山春子、渡辺辰五郎ら29名が共同して設立した。当初は、渡辺が自宅で開いている和洋裁縫伝習所(現東京家政大学の前身)の一隅に共立女子職業学校の看板を掛けて生徒募集をした。渡辺は、東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)で裁縫を教授し、本郷区東竹町(現文京区本郷1丁目)の自宅で裁縫塾を開いていた。共立女子職業学校は、女子に裁縫・手芸を授ける裁縫塾であったが、徒弟学校、実業学校、専門学校を経て、昭和24(1949)年に共立女子大学となった。『共立女子学園七十年史』『共立女子学園百年史』『共立女子学園百三十年史』などを参考に、草創期の様子を概略しよう。

#### 宮川保全と鳩山春子

共立女子職業学校開校の中心となった宮川は、嘉永5(1852)年江戸で誕生した。旧幕臣の子弟で、明治維新のときに父母とともに沼津に移住し、19歳で沼津兵学校に入学した。この学校は、軍人養成を目的として徳川家が開校し、思想家の西周<sup>にしあまね</sup>を校長にいただき、近代風の教育をしていたが、明治5年に廃校となった。そのため宮川は後の陸軍士官学校の前身である教導団の工兵科へ転校した。その後健康を害して教導団を除隊し、明治7(1874)年、文部省に奉職し、長崎師範学校勤務となった。翌8(1875)年、東京女子師範学校が開設されると省令によって転任した。しかし、まだ生徒が集まっていなかったため、一時東京女学校で講義を受け持っていた。

宮川とともに共立女子職業学校設立発起人となり、後に第六代校長、専門学校初代校長、高等女学校初代校長などとして活躍する鳩山春子（旧姓多賀）は、父松本藩士多賀努、母賢子の七人兄弟の末子として、文久元（1861）年に生まれた。勉強好きな春子を見て、父は明治7年、春子13歳のとき東京女学校に入学させた。東京女学校は、明治5年に設立された官立女学校の一番古いもので、修業年限は6カ年、国漢の読物と英語のリーディングを主要科目として、動物、植物、物理、化学などの近代学問を英語で学習させた。宮川が東京女学校に赴任したとき、2年生として多賀春子が在籍していた。宮川は春子が頭脳優秀であることを早くも認めていた。

しかし、明治10（1877）年の西南戦争で、財政が窮乏した政府はいくつかの官立学校を閉鎖した。東京女学校は廃止されることになり、在学中の生徒は東京女子師範学校に転校させられ、春子はそういう生徒たちのために設けられた「別科」に入った。明治11（1878）年7月、同科を主席で卒業し、同年9月、同校本科に入学した。明治12（1879）年5月、文部省は春子他2名の優等生に米国へ留学させる内命を与え、出発は7月20日となっていた。そのころ、北海道開拓使の募集に応じ、明治4（1871）年12月渡米した津田梅子や山川捨松、永井繁子たちが留学中であった。春子らは喜び勇んで旅の支度をし、出発の日を待っていた。しかし、財政困難のため留学はとりやめとなった<sup>(1)</sup>。明治14（1881）年、春子は東京女子師範学校の全課程を卒業し、同校に奉職した。ここで宮川と同僚になった。ところが半年も経たないうちに、春子がかねて婚約中であった東京大学教授鳩山和夫と結婚するために辞職した。

### 共立女子職業学校を設立した理由

宮川は、明治19（1886）年2月、11年間勤務した東京女子師範学校を辞職した。そして、同年3月、共立女子職業学校を開校するのだが、その理由について、大正8（1919）年の創立記念式の講演で、東京女子高等師範学校は10年間に長官が代わるごとに主義主張が変わり、教科も生徒の服装なども漢・和・洋と

三変化し、生徒もその方向性に迷ったことや、その間に学んだ生徒たちは異なった教養を身につけて社会に出ることになったことなどを挙げ、

私はこの有様を見て感慨に堪えませんので、是非とも女子のために私立学校を設立して、一定不動の主義の下に教育を授けねばならぬということを、痛切に感じたのでございました。ついで十八年に東京女子師範学校を男子師範学校に合併するの議が起り、私共は大反対でありましたが、遂に実行せられましたので、十九年の二月の卒業式を了えると同時に職を辞し、私が主唱者となりまして旧東京女子師範学校に關係のあつた有志の人々を糾合きゆうごうして、一同発起人となって、本校を設定するに至りましたのでございます。  
(『共立女子学園七十年史』16頁より)

と述べた。「女子のために私立学校を設立して、一定不動の主義の下に教育を授けねばならぬ」という思いからであった。

### 宮川の女子教育の目的

また、宮川は、女子教育の目的について、大正6(1917)年の創立記念式の講演で次のように述べている。

その頃(筆者注:共立女子職業学校開校前の明治18年ごろと思われる。)女子教育はまだ振わず、官立には東京女子師範学校(明治八年設置)附属高等女学校(明治十五年設置)華族女学校(明治十八年設置)の三校、私立には跡見女学校(明治八年)その他数校あるのみであった。而もいずれも教えるところ文学に傾き、技芸を顧るものがない。普通の女子は小学校を卒えても更に進学する学校がなく、唯舞踊や音楽や插花などの遊芸をこととして、勤労に従うものがない。女子で勤労に従うものといえば、印刷局の女工が小学校の女教員位のものである。世は日進月歩の勢いで進み、生存競争は日一日と激甚になるのに、女子に生活能力がないとは、何と気の毒なことではあるまいか。

また、近頃的女子は平気で嘘をつく。これは男子とても同じことであるが、すべて教養がない為に、道徳性が低いといわねばならず、これまた私が女子に対して、最も気の毒に思うところである。

女子に生活能力がないことと、道徳性が低いことを改めてやるのが、今日国家の急務と考えられたので、私は旧同僚の諸氏と相談して、女子の為に職業学校を建てることにした。(『共立女子学園七十年史』25頁より)

このように宮川的女子教育の目的は、手に職をつけることと道徳性を高めることであつた。

そこで技芸工作を主とし、合わせて常識を養い、婦徳を磨くための多少の学問を授ける方針をとつた。京都、大阪など関西方面には女子に裁縫、機織はたおり、袋物、押絵などの手芸の他に、簡単な読、書、算や女子礼法などを授ける女紅場によこうばという教育機関があつた。宮川は、普通の女紅場よりも高い技芸を習得させ、女子の自活の道が立つことを目標とした。生業としての職業教育を授けるというところに特色があつた。

## 校舎設立

明治19年3月、「女子に職を授ける共立の学校」という意味あいで名付けられて出発した共立女子職業学校は、渡辺辰五郎の和洋裁縫伝習所に間借りをして始めたが、生徒は続々と集まってきて、すぐに満員となった。同年8月、近くの本郷弓町2丁目に広い家を借りて移転したが、これもやがて満員となった。宮川は、校舎設立の必要を感じて、発起人の一人永井久一郎に相談した。永井は当時文部省の官吏で、小説家永井荷風の父である。永井は、当時文部省書記官であつた服部一三と、文部省会計次長であつた手島精一に相談した。他にも矢野次郎、富田鉄之助、山岡次郎にも相談をかけ、これらの人々が相次いで共立女子職業学校の設立発起人に加わつた。教育制度に明るい役人を発起人に加えて、明治19年8月、東京府知事から私立学校設置の認可を得た。服部一三を

校長に、手島精一を校長補にし、宮川自身は幹事として校務を見ることにした。服部と手島は文部省の官吏でもあるので、実際には宮川が校務を取り仕切った。

神田錦町の大蔵省の銀行簿記講習所の建物が空き家となっていたのを、矢野の斡旋で借り受け、新校舎に移転して9月16日から正式に授業を開始することができた。後にこの日を創立記念日とする。しかし、3カ月とたたないうちに、大蔵省から家屋明け渡しの要求を受けた。このとき、服部と手島が上司の森有礼文部大臣に学校の苦境を具申し、私立学校に援助の手を差し伸べるべきだと力説した。

森は明治18(1885)年12月、初代文部大臣に就任した。翌19年、「小学校令」、「中学校令」、「帝国大学令」、「師範学校令」の四つの学校令を制定し、日本近代の学校制度の基礎を築いた。服部と手島からの具申を受けて、森は、神田一ツ橋通町22番地に伴正順が所有する旧旗本屋敷があったので、文部省がその屋敷を地所ごと買い上げ、長屋などに模様替工事を行った上、共立女子職業学校に無償で貸し下げるよう取り計らった。官立学校とほとんど変わらない援助を加えたのである。そして明治20(1887)年2月、共立女子職業学校はここに移転した。同年8月、二階建32坪を新築し、明治23(1890)年6月には西洋風二階建80坪を新築した。そして明治25(1892)年2月、宮内省より校舎・敷地を下賜されるという恩典を受けるのである。

## 創設期の教育

創設期の共立女子職業学校は、明治18(1885)年8月12日発令の「教育令改正」(太政官布告第二十三号)の制度上、第二条「学校ハ小学校中学校大学校師範学校専門学校其他各種ノ学校トス」の「其他各種ノ学校」として発足した<sup>(2)</sup>。小学4年卒業以上の学力の者を入学させ、修業年限は、1年乃至2年であった。「第一学年報告書」(明治19年9月~20年8月)によると、開校時の職員は12名、入学生は甲科178名、乙科186名、合計264名だったが、20年8月の第1回卒業生は23名であった<sup>(3)</sup>。甲科は技芸科目である裁縫・編物・刺

繡・造花の4科目のうち、2科目を選修する。乙科は1科目のみを選修する。明治20年度も入学生は259名だったが、翌21年8月に卒業した者は甲科4名、乙科22名、合わせて26名と少なかった<sup>(4)</sup>。入学を希望する者は多いのに、中途退学者が多いことから、当時の女子が数年の学業を続けることは非常に困難であったことが窺われる。

裁縫・編物・刺繡・造花の術科を本務とし、読書・習字・算術・作文・家政・理科の学科を補助として、女子の生活上必要の事を授けた。学科は1週間に2時間内外とした。英語は第1学年の甲科生で希望者のみに教授し、第2学年からは甲乙両科とも随意とした。月額授業料は甲科1円30銭、乙科80銭であった。生徒の製作品から生じた純益金の半額以下を該当の生徒に配布し、生徒の名義で貯金させ、卒業時に返金するとした。こうして節儉貯蓄の良習をも合わせて養成するようにした。

職業人として立てるようにする術科の訓練の中で、徳性が養われ、女子のおしゃべりなどの悪癖も矯正することができると宮川は考えた。そしてこういう教育思想は、欧州の教育状況を視察して帰朝したばかりの森や手島の強い共鳴を得たのである。

## 注

- (1) 『共立女子学園七十年史』(10頁)。『共立女子学園百年史』(423頁)では、「女子が米国教育に深入りするのは我国風に適しないだらう」という理由で留学がとりやめになったと記されている。
- (2) 『共立女子学園百年史』(93頁)、(3) 同(98頁)
- (4) 『共立女子学園七十年史』(33)頁

## 参考文献

- 『共立女子学園七十年史』
- 『共立女子学園百年史』

『共立女子学園百三十年史』

『学制百年史』『学制百年史 資料編』文部省

『学制百二十年史』文部省

## 小林一男の私製・大学卒業アルバムについて

—東京帝国大学文学部国文学科卒業—

たにもと むねお  
谷本 宗生(大東文化大学)

本号のコラムで紹介した小林一男は、お手製の大学卒業アルバムをみると、1941(昭和16)年3月に東京帝国大学文学部国文学科を卒業し、浜松第一中学校に就職しているようだ。大学卒業アルバムの余白に、若い小林の真摯な心情や率直の思いが、写真に交えて簡略なコメントとして記されている。

\*\*\*\*\*

### [冒頭]

男児三年見ざれば刮目して待つべしとか、感激と忍苦と煩惱と、若き日の魂の苦闘の跡をひたひたに我が胸にささやく。スウヴニール…悔多き過去ながら、自分は何んな瞬間に於ても真剣だつた。だから自分は、自身に対しても人に対しても何等の弁解を要しない。自分ハ喜びにも悲しみにもよきにもあしきにもどくろの歌を呟いて来た。

三河郷友会入舎当時

[集合写真]

三河郷友会記念祭当日

[集合写真]

文学部学友会旅行 日光帝大植物園ニテ

[集合写真]

昭和十四年度 三河郷友会水泳大会

[集合写真]

昭和十五年盛夏 三河郷友会水泳大会 於西浦海岸

[集合写真]

国文関西見学旅行 本願寺前 御所 法隆寺

[祈念撮影]

国語研究室会 於二食集会場

[集合写真]

国文クラス会 第一回(昭和十三年)新入間なく 於白十字

[集合写真]

卒業論文作製 酎の頃

寄宿舎 帝大図書館前 時計台大講堂 文学部アーケード

高校同窓会 2601.1.2 於蒲郡竹島館

[集合写真]

卒業論文・完成に近い頃

寄宿舎 だんらん(拙宅) 舎のあちこち

三河郷友会卒業記念 就職写真

[集合写真]

大学生活惜別

歴史を吐く門(赤門)

今更何の官学の悲哀ぞ、赤門閥は此所にて生れる。力を謳歌する貧書生の登龍門だ。お役人教授の熱のない講義に、単位かせぎが身の為か。ほろ苦い此の反省。卒業証書ハ反故にすとも汝、力を忘る勿れ。

大図書館

マーブルの豪華な床、房珠の柔かいふくらみの装飾を持った、明るく温い白亜の欄間。肱附のふかくする椅子にかけて、豊富な目録に目を曝す。…ここで貧書生の貴族性を酔ふ。さもなくバ蟻の塔の様に高文パスの甘みを夢みる卑小な黒い小粒となつて、営々と出入りする。

心字池より時計台を望む

鯉とスツポンと鯰と、水蓮と藤棚と、奇岩と、捨小舟とおしどりの稀の訪れと。

心 字 池 畔

構内で自分が一番好きだつた場所、茅鯛の鳴く夕べもあつた。法学士の同級生F君と夢の様な池畔をめぐりながらの夢物語…「鯉は何故とぶのでせうか？」山上御殿の下だつた。

[巻 末]

ケイブ・オブ・グツド・ホープへ!

\*\*\*\*\*

純粋な小林の目からすると、「高文パス」などの立身出世のため、「熱のない」「お役人教授」らの講義に辟易としながらも、学生らは「単位かせぎ」の行為に明け暮れ、東京帝国大学の卒業に固執する赤門閥は、学士の卒業証書を獲得するだけの醜悪なものに見えたかもしれない。とはいえ、山上御殿の下にあった心字池(三四郎池)畔が小林にとって、きっと多くの学生らにとっても心落ち着く場所で、級友や友人らと屈託なく夢物語や恋愛談などを語り合うオアシスの地であったものと思われる。

## 進学案内書にみる戦前期東京の予備校(24):

### 『最新東京学校案内』(大正10年)(3)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(慶應義塾大学非常勤講師)

今号は、前号に引き続き武田芳進堂より刊行された『最新東京学校案内』を見ていく。今号では「第十五類 予備学校」「第十六類 雑種の学校」に掲載された予備校の情報を見ていくことにする。なお、研数学館のみが第十六類に掲載されたものである。

#### 早稲田高等予備校

位置 東京市牛込区馬場下町二十四番地(電話番町一一三〇番)

目的 高等の諸学校に入学志望者のために予備教育を施す

修業年限 一ヶ年

学科 国語、漢文、英語、歴史、地理、数学、物理、化学、博物、図画

入学期 各学期の初(四月、九月、一月)とす。但し欠員あるときは臨時に許可することあるべし

学費 入学金二円、授業料一ヶ月三円五十銭

#### 日本高等予備校

位置 東京市神田区三崎町三丁目(電話九段三〇・三一番)

目的 高等の諸学校に入学せんとする者のために予備教育を施すを目的とす

修業年限 一箇年、学年は四月一日に始る

学科 修身、国語漢文、英語、数学、地理、歴史、物理、化学、博物、図画

入学期 四月、九月

入学資格 中学校四年級修了者及之と同等以上の学力を有する者

但し右の資格なき者も聴講生たることを得

学費 入学金三円、授業料一ヶ年金五十五円

校長 男爵松岡康毅

高等予備校

位置 東京市神田区今川小路専修大学内(電話九段一四四〇・一四四 一  
番)

目的 高等の諸学校に入学せんとする者の為め予備の学科を教授す

修業年限 一ヶ年

授業 昼間夜間の二部教授とす

学科 英語、修身、国語、漢文、数学、博物、地理、歴史、化学、物理、図画

入学期 四月一日より五月一日までとす、但し補欠として臨時入学を許すこと  
あるべし

入学資格 年齢十七歳以上の男子にして左の資格ある者に限る

一、中学校第四学年修業者

二、甲種商業学校卒業者

三、師範学校卒業者

四、専門学校入学者検定規定(ママ)に依り検定合格證書を有する者

五、文部大臣に於て専門学校の入学に関し中学校卒業者と同等以上の学  
力を有する者と指定したる学校の卒業者

六、履歴により本校に於て中学校卒業者と同等の学力ありと認めたる者

学費 入学金二円、授業料一ヶ月五円

校長 法学博士河津暹

大正高等予備校

位置 東京市神田区錦町三丁目二番地(電話神田三一七〇・三九四〇番)

目的 高等の諸学校に入学せんとする者の為めに予備教育を授く

学科其他 学科は国語、漢文、英語、幾何、代数とし、修業期間は約三ヶ月、授

業は午後とす、入学資格は中学四年修了程度、授業料は月額金四  
円

### 錦城予備学校

位置 東京市神田区錦町三丁目

目的 本校には左の二科を置く

一、普通科(夜間) 昼間中学校に通学する事能はざる者及び中学校の各  
学年級に入学すべき準備を為さんとする者のために普通学を教授するを以  
て目的とす

本校には初学者の為に特に英語及数学を最初より教授するの便法を設  
く

二、高等科 高等学校、高等商業学校、高等工業学校、海軍兵学校其他 各種  
専門学校に入学する者のために予備学科を教授するを目的とす

修業年限 普通科は四箇年、高等科は一箇年とす、授業は毎日午後六時よ  
り九時又は十時に至る

学科 普通科 修身、国語漢文、英語、歴史、地理、数学、物理、化学、博物、  
習字、図画、体操

入学期 学年始は四月なれども第二学期、第三学期の始めにも入学を許す

入学資格 普通科は尋常小学校卒業の程度

高等科は中学校、甲種商業学校、農学校卒業の程度

学費 入学金一円、授業料一ヶ月二円

校長 文学士矢野道雄

### 開成予備学校

所在 東京市神田区淡路町二ノ四(電話神田一四一番)

目的 本校には左の分科を置く

(一) 中学科(夜学) 中学の学科を速成せんとする者又は中学校の各 年級

に入学せんとする者の為に中学校の学科程度に拠りて普通学を教授す  
(二) 高等受験科(午後) 高等学校、高等商業学校、高等工業学校、其 他の  
官立諸学校に入学せんとする者の為に中学校補習科程度に由りて普通  
学を教授す

修業年限 中学科は五ヶ年、高等受験科は一ヶ年

学科 中学科 修身、国語、漢文、習字、英語、数学、物理、化学、歴史、地 理、  
博物、図画、体操

高等受験科 国語、漢文、英語、数学、物理、化学、歴史

入学期 学年は四月に始まる

入学期は毎学期の始(四月、九月、一月)なれども欠員あるとき臨時入学  
せしむることあるべし

入学資格 中学科一年級は尋常小学卒業の程度、二年級以上は前学級の課  
程につき試験を行ひたる上許可す

学費 検定料一円、束脩金一円、授業料月額四円

私立正則予備学校

位置 神田区錦町三丁目二番地

目的 高等及中等の普通学科中主として数学、物理化学、国語漢文、地理歴  
史、博物及び図画等を正則に且つ速成に教授す

学級 午前部 高等予備科、初等数理化予備科、中学科

午後部 正則補習科、数理化予備科、中学科、初等数学科

夜学部 初等数学科、中等数学科、物理化学部

臨時部 臨時受験科、夏期講習会

入学期 毎学期の始(九月、一月、四月)とす。但し欠員あるときは臨時入 学  
せしむ

入学資格 品行方正にして義務教育を了へたる満十二年以上の男子

学費 入学金一円

授業料月額左の如し

高等予備科・正則補習科 各二円五十銭

数理化予備科・中学科・初等数理化予備科 各二円

数学科・夜学諸科 各一円五十銭

職員 校主 齋藤秀三郎、主幹 理学士松村定次郎

## 研数学館

位置 東京市神田区仲猿楽町(電話九段二一二四番)

目的 数学を教授す

学級 初等科、中等科、高等受験科の三科に分ち、各科は毎月初めに新設し

各三ヶ月を以て卒業せしむ

学費 入学金一円、授業料全納五円

研数学館の後ろには、「其の他の数学の学校」として普及英語学校数学部、日進英語学校数学部、三田英語学校数学部が掲げられ、それぞれの学校の箇所を参照するよう指示されている。

掲載された学校を見ると、私立大学系の予備校が減っていることが分かる。これは大学令により、大学として認可されるために修業年限 2 年ないし 3 年の予科を設置する必要に迫られる中で、予備校を経営することができなくなったということに関係しているように映る。私立大学系の予備校は 6 校あったが、この進学案内書では中央、明治、東洋、法政のものが掲載されていない。

ただし、この進学案内書に掲載されていないという事実のみで、掲載されていない予備校がなくなった、あるいは生徒が入らなくなっていたと断ずることはできない。「関係しているように映る」という、持って回った言い方をしたのもそのためである。廃校時期の確定は、その申請文書など公的な史料によってなされるべきものである。本連載の初期にも触れているが、予備校は廃止の申請書類が見つからないことも多いという難点はあるが、しかるべき方法の存在は確認しておか

なければならない。

私立大学系の予備校が減った一方で、それ以外の予備校の情報が増えたわけでもない。大正高等予備校が本連載の中では初出だが、実のところ、この予備校も長くは続かない。学校の位置を見ても分かるように、大正高等予備校は正則英語学校と正則予備学校と同じ場所に設置されている。電話番号が異なるので、何らかの対応はしているものと思われるが、自前の校舎を持つには至っていないのである。

次号からは、1922（大正 11）年に刊行された『一目瞭然 東京遊学学校案内』に掲載された予備校の続きを見ていく。

### 神辺先生を訪ねて(3)

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

去る4月21日、沿道にオレンジやブルーのジャーマンアイリス、ピンクのツツジ、赤いバラや赤紫のクレマチスなどが風に揺れる道を通して、神辺先生が入所されている施設を訪ねました。

スタッフさんが押す車イスに乗って、先生は1階のファミリールームに下りてきてくださいました。お元気そうで、しっかりと大きな声でお話されます。「お体の具合はいかがですか？」とお聞きすると、「体は大丈夫なんだけれどね、気になっていることがあってね」とおっしゃいます。「私は以前立川に住んでいてね、幼稚園からの友人が市長選挙に出るので、その応援演説を頼まれたのだけど、足が弱っちゃったからね、行けなくて、どうしたものかと、そのことが気になっている」とおっしゃいます。先生は昔、そのご友人の選挙応援演説をしたことがあるそうで、演説の後、勢いづいてトラックから飛び降りて、足を骨折したのだそうです。それから足が悪くなって、ここ(施設)に入院しているのだとおっしゃいます。そんなお話を30分ほどされました。

「先月お届けした尾形先生のご本をご覧になりましたか？」とお聞きすると、「ああ、もうこの年になってから、人の悪口を書くのもどうかと思って、もう書かないことにした」と。3月11日、先生のご自宅の蔵書整理の時に、どなたかが見つけてくださった尾形裕康著『新版日本教育通史』や『日本教育史研究』など3冊ほど、たなかともこ田中智子様とお届けしました。その時は、「これだよ。これが欲しかったんだ!」と、大変喜んでおられたのですが…。神辺先生は早稲田大学大学院で6年間、尾形先生の猛烈果敢な授業や、間断なく出される課題と仮借のない叱責の厳しいご指導を受けられたとのことで、そのころの教育学界の裏話を書きたいと、昨年11月にお訪ねした時はおっしゃっていたのでした。

『ニューズレター』第134号と135号の印刷したのをお渡しすると、懐かしそうにしばらく表紙を見つめられて、「上手に編集されましたね」と感心しておられました。

その後、お部屋を3階から2階に移られたとのことで、食堂の真ん前の居室に案内していただきました。いくぶん広くなったお部屋で、大判の国語辞典と数冊の先生の近著と、そして尾形先生の著書が机の上に整然と並べられてありました。ランチタイムになりましたので、再訪を約束して退所しました。

時折、過去と現在が交錯する中に居られるようでしたが、さて、今回はどんな物語を聞かせてくださるでしょうか。5月の風薫るころにお訪ねしようと思います。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項 (2026年2月15日改訂)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の典拠を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (著作権の許諾確認) 記事のなかで用いた写真画像などに著作権が生ずる際には、著作元または所蔵先に執筆者が許諾の確認を行ってください。それが大学等の出版刊行物ならば、当該大学の事務部または資料館等の施設に照会し、適切な対応をはかってください。確認がとれたものを用いることとして、確認がむずかしいものについては、写真画像の掲載を差し控える必要があります。
8. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
9. (レイアウト等) 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
10. (web公開) ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
11. (研究交流会) ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
12. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

---

## 短評・文献紹介

---

建築家の内田祥哉(1925~2021年)は、東京大学や明治大学などで建築構法学などを担当教授したといます。建築構法・建築生産を専門とする権藤智之によれば、内田は建築工学で学生らに対して、何を教えるべきなのかという点について、明確に「歴史」を教えるべきだと主張したとします。その歴史とは、「先端技術は変わりつづけ、すぐに古くなる。学生に教えるべきは社会的な要請に技術がどう応えてきたかという社会と技術のやり取りの過程であり、こうした技術が受容される過程の理解は、次々に新たな技術が生み出される未来においても有効」とし、「結局のところ原則は構法そのものに属するだけでなく、ある構法が生まれて普及し、やがて廃れていくといった過程そのもの」であり、「内田が教育について『構法の変遷を教えるべき』という場合、構法の変わり方やプロセス自体に地域や時代を超えた原則がある」と捉えます(権藤智之・戸田穰編『内田祥哉は語る』2022年所収)。

この点に関して、東京大学で内田に指導を受け、当時の自分はこれに批判的でもあったと吐露する建築家の隈研吾によれば、内田の教育・研究姿勢は、実は新たな建築の可能性を見出せるものだった・・といます。内田は、日本の建築のベースとなっている生産という視点から、建築と人間、建築と社会とをつなぎ直そうとしていると。また内田の後半生の東京大学で、日本在来の木造住宅の魅力と柔軟性、深い合理性を教わったとし、内田から隈は「日本の在来木造住宅はモダニズム建築以上に柔軟であり、生活に密着したシステムであり、民主的な建築である」と教授されたそうです。隈によれば、日本の在来木造建築では、「『ゆるいモジュラーコーディネーション』であったゆえに究極のフレキシビリティを獲得できた」というのが、内田の発見であったのだと強調します(隈研吾『日本の建築』2023年所収)。建築学の世界においても、やはり温故知新の精神はしっかりと息づいているのでしょう。(谷本)

ドキュメンタリー映画「『新渡戸の夢』～学ぶことは生きる証～」上映会&トークイベントを鑑賞して

去る4月25日(土)・26日(日)、東京都千代田区神田神保町の旧岩波ホールにおいて、『新渡戸の夢』上映会&トークイベントが行われた。

新渡戸稲造は第一高等学校校長、東京女子大学初代学長など多くの教育機関に携わったが、1894(明治27)年1月、新渡戸が自ら創設した学校があった。<sup>えんゆうやがっこう</sup>「遠友夜学校」という、授業料無料、教科書・文房具も無料提供、男女共学、年齢制限なしの、だれでもいつでも学べる夜学校だった。元米国大統領リンカーンの言葉”With malice forward

none, With charity for all.”<sup>なんびと</sup>(何人にも悪意を抱くこと無く、全ての人に慈愛を持って)を掲げて、リンカーンに学べと励ました。新渡戸の考えに賛同する友人や札幌農学校(現北海道大学)の教授や学生たちが無報酬で教えた。新渡戸は病氣療養のため 1897(明治 30)年 10 月、札幌を離れるが、亡くなる 1933(昭和 8)年 10 月まで校長だった。北海道における最も古い歴史を持つ社会福祉事業の一つとなった。

映画は、この新渡戸の精神を継承して、現在活動している人々や学ぶ人々に焦点を当てたドキュメンタリーである。北海道大学にボランティアサークルとして開設された市民講座「平成遠友夜学校」の様子や、教育を十分に受けることができなかった人々のために「札幌遠友塾自主夜間中学」を開設して、現役の教員や元教員、会社員などがボランティアで教え、学んでいる人々の様子が映し出される。

若いころから新渡戸は三つの学校を作りたいという夢を抱いていた。「老人や成人に歴史・経済学・農学・自然科学を教える学校」「専門学校や大学の入学準備を希望するが予備校に正規に出席できない青少年を対象とする学校」「貧しい両親を持った粗野な子供たちや労働者の少年や、日雇い労働者らの子弟に対する夜学校」だった。

1893(明治 26)年の夏、メアリ夫人のアメリカの実家で働いていた女性が亡くなり、遺産で 1,000 ドルがメアリ夫人に贈られた。メアリの父が、孤児院から引き取り家族同様に養った女性が手仕事などをしてこつこつと貯めたお金だった。新渡戸夫妻は、その貴いお金で貧しい両親を持った子供たち、昼間は働いていて学校に行っていない子供たちのための夜学校を作ることにした。やがて『論語』の「朋あり遠方より來る また楽しからずや」などから「遠友夜学校」と名付けた。

この学校は、戦時中、軍事教練を課すように命じられたが、それに従わなかったため、1944(昭和 19)年 3 月に強制的に閉校させられた。50 年間で学んだ人は 5,000 人を超え、約 1,170 人が卒業した。学業の傍ら教師役を務めた札幌農学校・北大の学生は 500 人以上いたという。後に作家となる有島武郎もその一人だった。有島は 1909(明治 42)年 1 月から 1915(大正 4)年 3 月まで代表を務め、校歌を作詞している。校歌は 9 番まであり、「楽しみの極み」は何か、金銭・勲功・名誉・高い地位・綺麗な衣装・美酒・豪邸などは否定され、正義・善・真心・昔の聖人のような立派な心・清らかな心・天に恥じない心などが「楽しみの極み」と謳われている。新渡戸の意をよく汲み取った校歌が映画のテーマソングのように流れていた。映画は、今も夜間中学を必要としている人たちのために、札幌市議会で、札幌に公立夜間中学校の開設を要望する「北海道に夜間中学校をつくる会」代表者の熱弁で締めくくられていた。ちなみに 2022(令和 4)年 4 月、北海道初の公立夜間中学校「札幌市立星友館中学校」が開校された。

上映後、この映画の監督、プロデューサー、(一財)新渡戸基金理事長、新渡戸稲造とメアリをモデルにした朗読劇を上演している俳優、東京女子大学副理事長が登壇し、それぞれの立ち位置から新渡戸に関するエピソードなどを紹介した。

映画は2024年から、札幌や盛岡、花巻など新渡戸ゆかりの地を始め、東京、愛知、奈良、北九州市など全国で自主上映会が行われている。

かつて「遠友夜学校」の教師を務めた札幌農学校・北大の学生たちの多くが、「仕事で疲れているにもかかわらず、熱心に通ってくる生徒たちとの触れ合いの中で、自らが救われた、感謝したい気持ちだった」という思いを抱いたという。教えることを通して学生たち自身が人間形成と生き方に影響を与えられたという。私はこの映画を観て、教育とは、「教える者、教わる者が互いに学び合うことである」という思いを新たにしました。学ぶことは楽しみであり、「生きる証」と言えよう。(長本)

製作・配給:新渡戸の夢映画製作委員会 90分

4月から研究休暇に入ったものの、まだ嘉納治五郎についての連載記事を再開できていない。そんなぱっとしない状態のなかでも、先日、ある報告レジュメをつくる機会に情報カードを活用したところ、かなり手応えを感じた。文献につけておいた付箋を見ながら、簡単なメモを1件1枚ずつカードに書き付け、100ほどたまったところで、カードを並べ替えながらグループをいくつか作り、グループごとにタイトルをつけていったら、発表の骨子がおのずとできていった。少し手間がかかったが、手を動かしながらカードを並べ変えていくと、アイデアが生まれやすいことに改めて気がついた。そういえば、パソコンやスマホが普及した現代でも、紙の情報カードは、大きな文具店や百元ショップで、しぶとく販売され続けている。

こうした気づきがあったので、1969年前に岩波新書で刊行されて「京大式カード」と呼ばれる情報カードの普及のきっかけになったとされる梅棹忠夫『知的生産の技術』を読み直してみた。この本は大学入学以来何度か読んだことがあったが、すぐには研究室内で見つからなかったため、今回は電子書籍で読んだ。

さすが、現在でもなお説得力を感じる内容がいくつもあった。たとえば情報カードの大きさについて、本書のなかで梅棹は次のように述べている。

ふつうカードというと、どういうわけか、かなりサイズのちいさいものをおもいうかべるひがとおいようである。わたしの経験では、おもいきっておおきくしたほうがよい。カードをつくりたいというひに助言をもとめられて、いつも、おおきくしなさいと忠告するのだが、できあがりを見ると、せいぜい A6 判(10.5センチ×14.8センチ)くらいで、

全部ちいさすぎる。ちいさいカードは、単語カードか図書カードにはよいかもしいれないが、複雑な知的作業には不向きである。

京大型カードは、B6判である。B6 というと、12.8センチ×18.2センチもあるから、ずいぶんおおいものである。これだけあれば、たいていの用はたせる。カードをつかいたとしても、途中で腰くだけになって、やめてしまうひとがおおいは、ちいさいカードをつかっているからではないかとおもう。ちいさいカードでは、どうしても「おぼえがき」になってしまって、本格的なノートのかわりにはつかえないからだ。

実は、先日の情報カードを使ったレジュメづくりでは、8.6cm×12.8cmの「ルーズリーフ・ミニ」という小さなルーズルーフを情報カードとして利用した。枚数が増えてもかさばらないため、専用バインダーをたくさん入手したほど気に入っていたのだが、梅棹の上記の文章に触れて、かなり揺らいている。ためしに画用紙をB6サイズに切っただけでのカードを試作して帰宅途中の電車内で試してみたところ、非常に使い勝手が良かった。思いついた文章を大きめの字で書く広さがある上、紙がしっかりしているので10枚以上まとめてもってればバインダーなどがなくても、車内で立ったまま筆記することができる。フィールドワークや共同研究で磨かれた梅棹の方法論は、いまだに有効なものがいくつもありそうだ。(富岡)

---

## 会員消息

---

北康宏(同志社大学)が記された『中田薫』2023年を拝読しました。大学史としてもなかなか読み応えある内容で、とても勉強になりました。とくに、私が知らなかったエピソード。それは、中田の生前、東京大学法学部に寄贈されていた図書類のほかに、中田の没後、未確認の図書ら(私的蔵書)が法学部内で見つかり、それらと合わせて、中田家に残る蔵書や関係資料を、大学へ正式寄贈のお願いをするため、中田家親族らと話し合い、「代価は一切差し上げられません」という要求を、「毅然と受け入れてもらうことができた」というお話。当時の担当者であった東洋法制史の滋賀秀三から北が聞き取りしていたことで、明らかとなった史実といえるでしょう。(谷本)

財務省が、私立大学の統廃合や定員削減にむけて、2040年までに少なくとも250校、学部定員にして14万人程度を減らす必要があると、初めて数値目標を公表した。そこで「助成金の支出に見合った教育の質の確保」という観点から、義務教育で学ぶ内容の授業が行われている大学があると指摘され、いわゆる「Fラン大学」を潰せという意見で盛り上がっている。でも、そもそも「教育の質」ってなんだ。定員に満たない大学に通っている学

生は、一生懸命学んでいるし、教員も教育を考えて、本当に学生を大事にしている。定員に満たない大学は、教育の質が低いから潰してもよいとする方向に流れていくと、たいへんなことになる。作家の三浦朱門は、昔の旧制高校を「大日本帝国の贅沢品」と言ったようだが、現在の大学も「贅沢品」として、認めてくれてもいいではないか。大学なんか、無駄なものだけど、わけのわからない大学がたくさんあったほうがいいよねというのが、社会の豊かさではないか。(山本剛)

短評・文献紹介に少し書きましたように、まだ研究が軌道に乗っているわけではありませんが、和歌山県立文書館に何度も通ったり、情報カードでアイデアを生み出す楽しさを再発見したりして、少しずつ研究を楽しんでいます。次号こそ、連載記事の執筆も楽しみたいと思っています。(富岡)